

## 『古今集』から『新古今集』の時代における和歌文学と中国文学要素の日本化

黄一丁

本稿は、六章に分けて、『古今集』から『新古今集』の時代における中国文学要素の日本化という問題を論じるものである。

序章では、まず和漢比較文学に関する私見を述べ、従来の和漢比較文学研究を、第一段階の「出典論」、第二段階の「変容論」「機能論」、第三段階の「応用論」という三段階に分けて捉えた。そして、本稿の研究は第二段階と第三段階とに属するものと述べた。更に筆者は、中国文学要素の日本化という概念を提起し、その定義を明らかにした。即ち中国文学要素の日本化とは、日本文学の中に存在する中国文学要素に見られる、日本の言語・自然及び社会の特徴による変化や、日本人の価値観による意識的或いは無意識な改造や、日本特有の文学形式に適応するための変容が発生したプロセスのことである。最後に、中国文学要素の日本化という課題において、『古今集』から『新古今集』までの時代が重要であることを説明した。いわゆる三大歌風のうち、古今調と新古今調は、特に中国文学要素と緊密に関連しつつ成立した。この時代における中国文学要素の日本化を考察することによって、古今調から新古今調への歌風の変遷の実態に関する理解を深めることが出来ると見込まれる。

第一章及びその付章では、次章で『千里集』を論じるための準備として、まず未解明であった西本願寺本『赤人集』中の千里歌と『千里集』との関係、及び新出資料である資経本『千里集』ならびに擬定家本『千里集』の本文の価値を論じ、次のような結論を得た。

第一に、西本願寺本千里歌は従来知られていた二系統とは異なる第三系統の『千里集』に属し、かつ錯簡を有する伝本である。第三系統は歌順においては流布本系統に近い一方、流布本系統と異本系統とに見られない、より原本に近いと考えられる独自異文を持つ。第二に、金子彦二郎氏によって異本系統の中の最善本とされた桂宮本の本文は、新出資料の資経本及び擬定家本と比べても圧倒的な優位性を有する。最後に、『千里集』の現存する三系統の中でも、桂宮本は句題と和歌双方の本文において優位性を有する一方、流布本系統及び第三系統は歌順において優位性を有すると考えられる。

第二章では、中国文学要素の日本化の実例として、『千里集』に見られる中国文学要素の特徴に注目した。『千里集』前半の四季部が白居易による詩想の影響を強く受けていることは先行研究でも指摘されているが、本章では晩秋の雁の歌と初夏の惜春の歌における白詩の影響を中心に論じた。初夏の惜春という詩想は、『千里集』のみならず、『拾遺集』から『新古今集』にかけての和歌文学に大きな影響を与えている。特に、中

国文学に由来する惜春の詩想が「更衣」という日本文学特有の発想と接合し、新しい詠み方を育んだという現象は、典型的な中国文学要素の日本化といえる。

また、『千里集』後半の部立構造は全体的に中国文学の影響を受けており、特に「遊覧」の歌には六朝文学に類似する特徴が顕著に見られる。その影響の大きさは、後世の日本文学に受け継がれていることから察せられる。ただし、『千里集』後半部の構造は、中国文学をそのまま模倣した結果ではなく、漢籍における部立の名称を参照しつつ独自に創案されたものと考えられる。

最後に、『千里集』及び同時代の和歌の特徴から、中国文学要素をストレートに和歌に翻案することは、『古今集』成立の直前の時期における中国文学要素の日本化の一特徴であることを述べた。

第三章では、従来あまり注目されていなかった『陽成院歌合』を取り上げ、そこに見られる中国詩の影響と変容のありさまを述べた上で、そうした変容が中国文学要素の日本化であることを論じた。

本歌合の主題である「惜秋」は、上代より存在する、日本文学に固有の意識とされる。しかし実際のところ『陽成院歌合』の歌には、中国文学、特に唐詩における惜春表現を摂取している表現が多い。

本章第二節では、本歌合における五首の歌に見られる「惜しめども秋は留まらぬ」などの表現が、白居易による惜春詩の表現と関連することを指摘し、この五首の詠者が直接に白居易詩に学んだ可能性、あるいは白居易詩の表現を摂取した惜春の和歌又は惜秋の日本漢詩の影響を受けた可能性を述べた。第三節では、本歌合一六番歌に見られる「はかなくてすぐる秋」という表現が、唐詩における「虚度」又は「空度」の表現に触発された可能性について論じた。第四節では、本歌合における三首の歌に見られる「別るる秋」という表現が、白居易詩に見られる「別春」または「辞春」などの表現を摂取した可能性について考察した。唐詩の世界では秋は物を思わせる季節であり、愛惜される季節とは言い難い。このような惜春詩の表現を惜秋歌に用いる現象も、中国古典文学由来の表現が日本風に変容を遂げた結果と見なすことができる。

本章の考察によって、『陽成院歌合』の和歌には、中国古典文学、特に唐詩の表現に学んだ表現が存在することが分かった。これは従来指摘されていなかった本歌合の特徴であり、そこから本歌合の文学史的意義を再考した。また、『陽成院歌合』の作者達が、唐詩より摂取した惜春表現を、秋の美景を愛惜するという日本人の価値観にあわせて、惜秋という日本文学特有の主題を詠む際に応用したという現象は、『古今集』以降の中国文学要素の日本化の特徴を反映している。この時期には、中国文学要素の変容される

度合いが増し、中国文学に存在する主題から日本文学特有の主題へと取り込まれることも起こるのである。

第四章では、亀を詠む和歌を例として、和歌文学における漢故事の日本化について論じた。『古今集』以降、特に『拾遺集』以降の和歌文学では、それ以前に比べて漢故事の利用が盛んになる。そこでは漢故事という中国文学要素が、徐々に中国文学の本義から離れ、日本人の価値観や風習に合わせて改造されてゆく。このような特徴は、古今調から新古今調へ移りゆく時期の歌風の変化と合致し、時代の傾向を反映していると考えられる。

中国文学に由来する亀の祥瑞思想は、『古今集』以降の和歌では長寿を言祝ぐ歌語に変容する。亀の長寿のイメージはさらに恒久のイメージに変容しつつ、実在の亀から「亀山」という歌枕に繋がってゆく。「亀山」は中国伝来の蓬莱山伝説とも融合し、新たな詠み方が形成される。一方、『法華経』などの仏典にある「盲亀浮木」の比喻が中古の和歌に取り入れられると、仏法を説くための寓言から逢瀬の難しさの象徴へと変容してゆく。

こうした変容は何れも、日本の自然と社会の特徴、又は日本人の価値観に合わせて起こった改造である。従って、亀の歌に取り入れられた漢故事の変容も、『古今集』から『新古今集』の時代における中国文学要素の日本化の例の一つとして捉えることができる。こうした例から、特に『拾遺集』から『新古今集』までの時期に、中国文学要素の日本化が甚だしく進んでいることが分かる。このような傾向は、第二章で初夏の惜春を検討した際に得られた結論とも一致するものである。

第五章では、『新古今集』の直前に成立した『千五百番歌合』における、藤原良経による漢詩判詞という新たな形式を持つ判詞を対象として考察した。中国文学に学んだ漢詩でもって、日本特有の文学形式である和歌の優劣を判じるという営みは、従来の漢詩の機能を日本文学に合わせて一新する試みであり、一種の中国文学要素の日本化と認められる。

『千五百番歌合』夏三において、丹後による「わかるればこれも名残のおしき哉夏のかぎりの日ぐらしの声」という歌に対し、良経は「寒蟬自本秋天物、送夏何因欲惜声」という漢詩判詞をつけている。本章ではまず、「ひぐらし」という歌語の季節感を巡って、良経と丹後との間に相違が生じた理由を解明することを試みた。そのためにまず、詩語「寒蟬」は漢詩では秋のものとして詠まれてきたこと、さらに、先行研究を踏まえつつ、「ひぐらし」は『古今集』から『堀河百首』までの時代において基本的に秋の歌語であり、詩語「寒蟬」の季節感と合致することを検証した。「ひぐらし＝寒蟬」は秋

のものであるという良経の判詞は、これらの事実に基づいていることが分かる。続いて丹後歌が「ひぐらし」を夏のものとして詠む背景について考察を行った。『金葉集』以降、俊頼歌の影響もあって、夏末の涼しさを象徴するものとして「ひぐらし」を詠む歌が増え、『新古今集』の直前の時期には、夏における「ひぐらし」詠の割合が顕著に増加している。『新古今集』夏部における「ひぐらし」は、秋を思わせる歌語の範疇から完全に脱しており、「ひぐらし」は夏末歌で詠まれる方が主流になっていた。このような変容は、「ひぐらし」と、もともと夏の歌語であった「せみ」とが混同されたこととも関係がある。こうした時代の流行に沿って、丹後は「ひぐらし」を夏の歌語と認識し、「夏のかぎりのひぐらしの声」と詠ったのである。

最後に、『新古今集』時代の良経が、「ひぐらし」を詩語の「寒蟬」と同じくもとより秋の歌語だと主張し、自詠においてもそれを実践している理由について考察を行った。夏三の判詞の序文によれば、和漢兼作歌人である良経は、和歌と漢詩とは同じ種類のものと考えている。だからこそ和歌を判じる時にも、詩語の季節を歌語の季節を判断する基準としたのである。良経のこうした意識は、「ひぐらし」「寒蟬」の例以外にも、詩語「雁」と歌語「かり」の例からも窺える。良経が詩と歌とを同類のものと考えていたことは、ただ『千五百番歌合』において漢詩形式の判詞を作成し、漢詩と和歌とを交互に並べる形にしたという形式的な面だけではなく、歌語と詩語との間に季節感の一致を求めるといふ、より本質的な面にもあらわれている。和歌史上においてはじめて「詩歌同類」の思想を明言した良経は、画期的な歌人であった。

『新古今集』の成立する直前の和歌文学に見られる中国文学要素の日本化は、第四章で見たように中国文学要素の内容を改造する一方で、「漢詩判詞」という新たな機能を創出しており、中国文学要素を中国には存在しない分野で利用するところまで進んでいる。これは、『新古今集』時代における中国文学要素の日本化の新たな特徴と認められる。

おわりにでは、序章から第五章までの内容をまとめ、『古今集』から『新古今集』の時代における中国文学要素の日本化について、以下のような結論を述べた。

『古今集』の成立する以前の段階では、まず中国詩を忠実に和歌に翻案し、その中に存在する詩想を素直に受け容れるという特徴がある。『古今集』以降、中国文学要素の日本化がますます活発になり、『陽成院歌合』のように、中国文学に存在しない主題にも中国文学要素が進入する事例がある。その後、『拾遺集』から『新古今集』の時期にかけて、中国文学要素は、日本の社会と自然の特徴、又は日本人の価値観に合わせて歌人によって改造され、甚だしい日本化を遂げた。本稿ではこのように、古今調から新古

今調の間における歌風の変遷を、中国文学要素の日本化という視点から捉えることを試みた。

最後に、本稿の社会的意義と和漢比較文学研究者の責務について、筆者の考えるところを述べた。